

Ⅲ なごやっ子の読書実態

1 はじめに

「なごやっ子の読書実態調査」は今回で41回目である。質問内容を少しずつ変更しながら、児童生徒の読書量や読書傾向について調査し、データを蓄積・分析することで名古屋の読書指導に役立てることをねらいとしている。

この調査は下表のとおり、市内の小中学生を対象に令和4年7月に実施したものである。

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
人数 (昨年比)	777 (+71)	797 (-45)	713 (+146)	655 (+50)	632 (-65)	671 (+10)	4391 (+167)
学校数	23	22	23	18	17	18	121

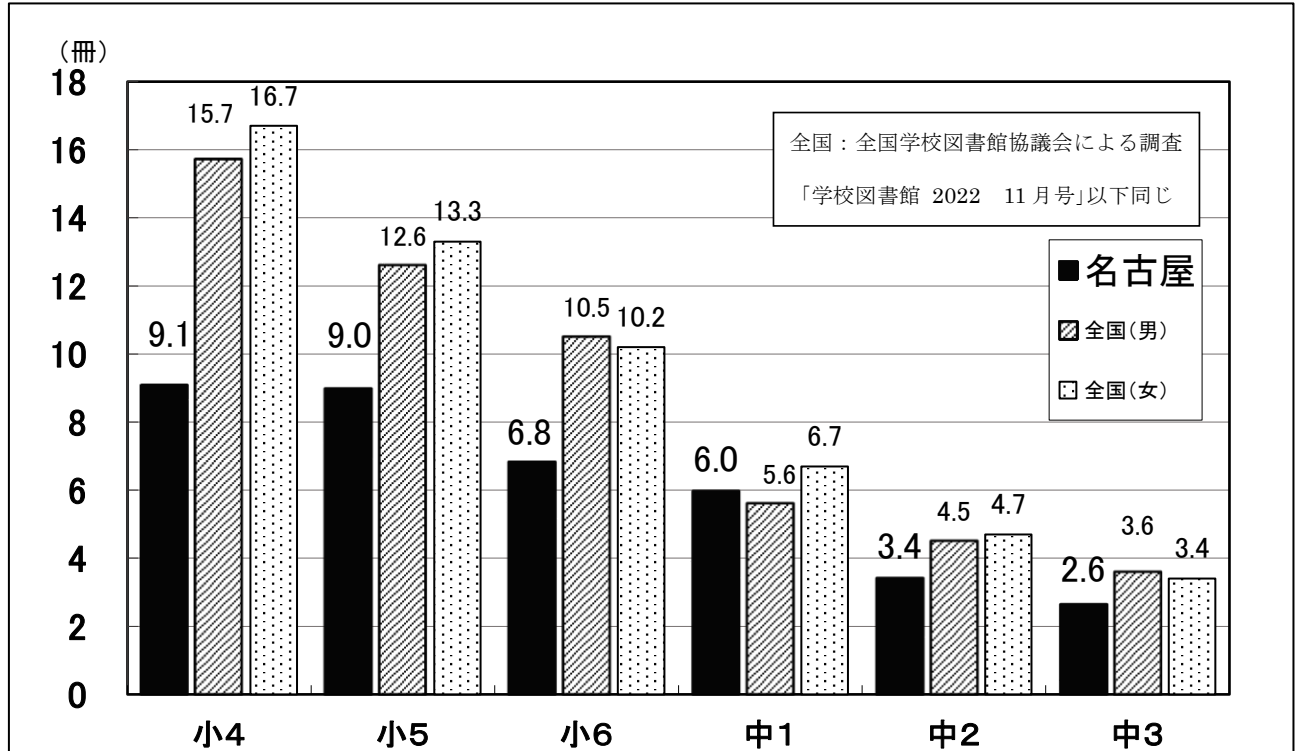
【調査人数と参加学校数】

2 読書実態調査の結果と考察

※ 表中の数字は、四捨五入を行ったことで、合計が100%にならない場合もある。

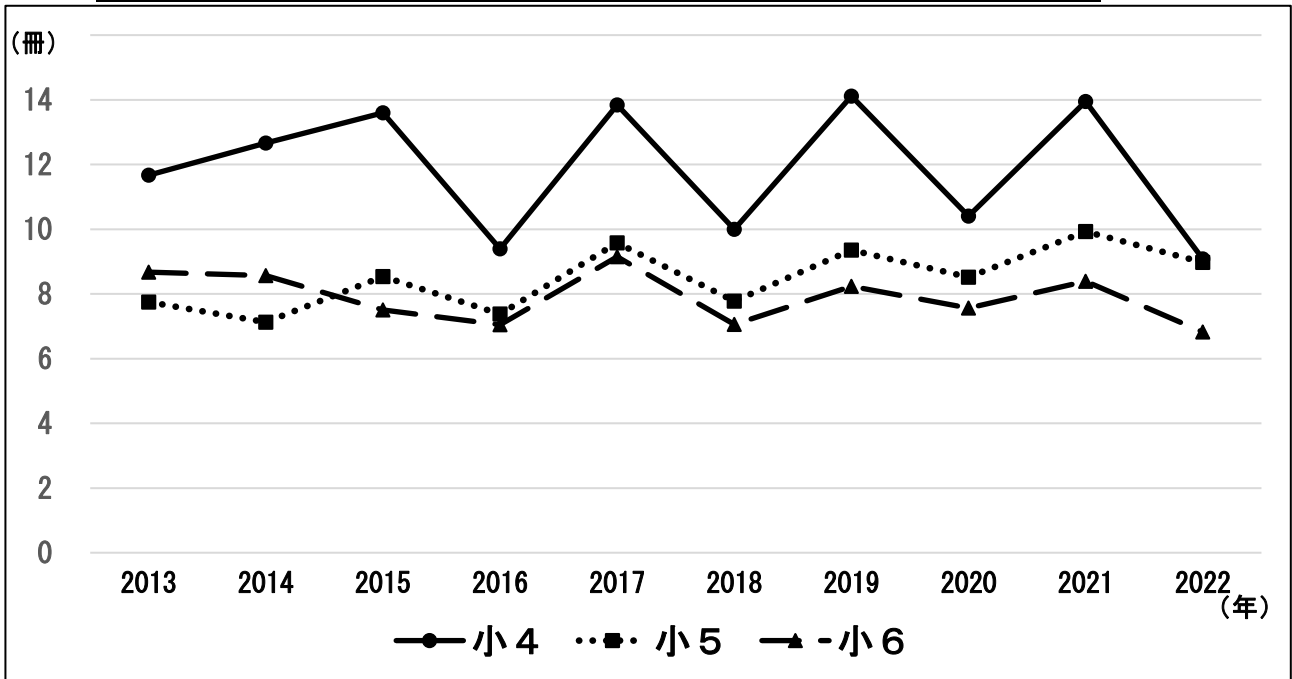
(1) 児童生徒の読書量について

① 一人あたりの1か月の読書量の全国との比較(6月)



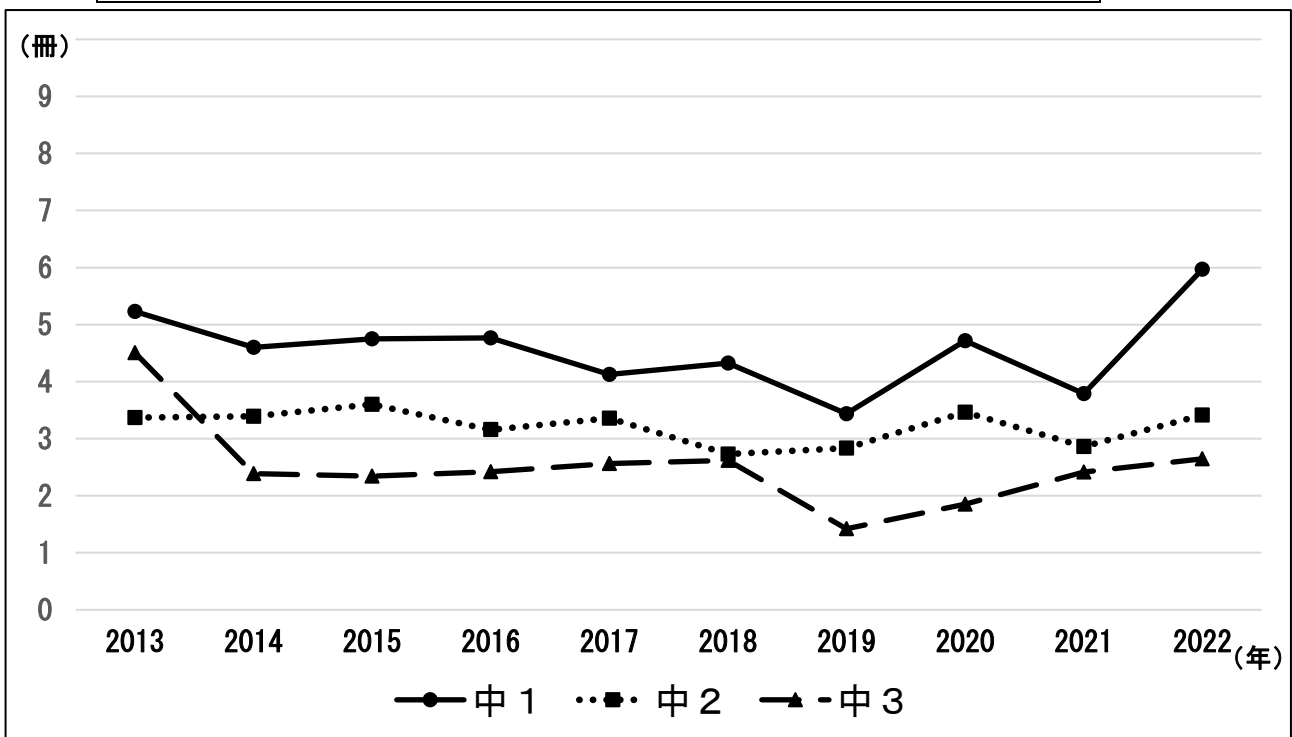
- ・ 全体的に全国平均を下回っている。

② 名古屋市の一人あたりの読書量の変化（小学生）



・ 全学年で前年を下回った。

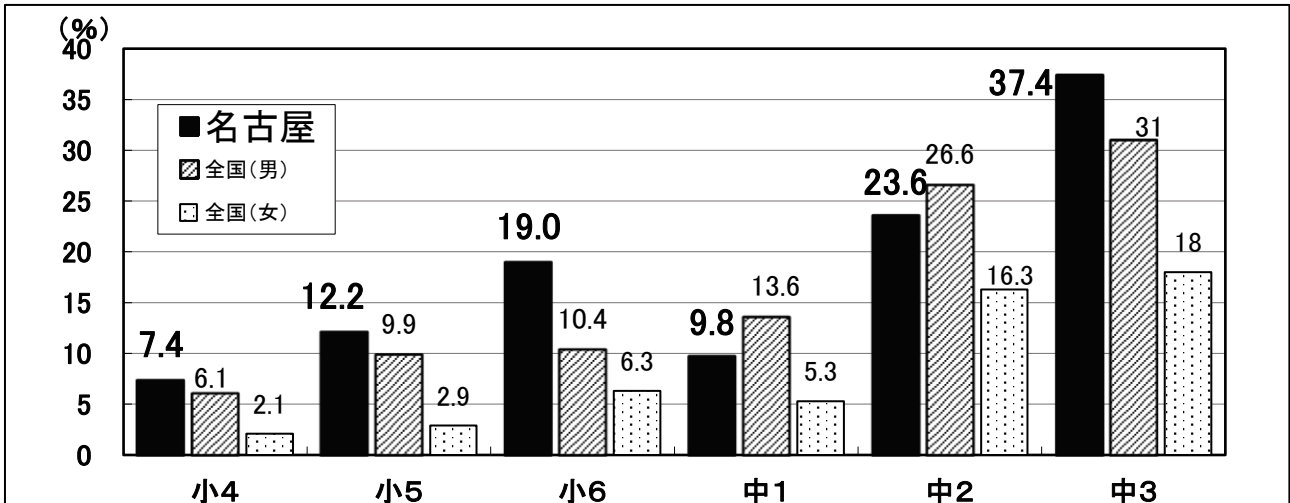
③ 名古屋市の一人あたりの読書量の変化（中学生）



・ 全学年で前年を上回った。

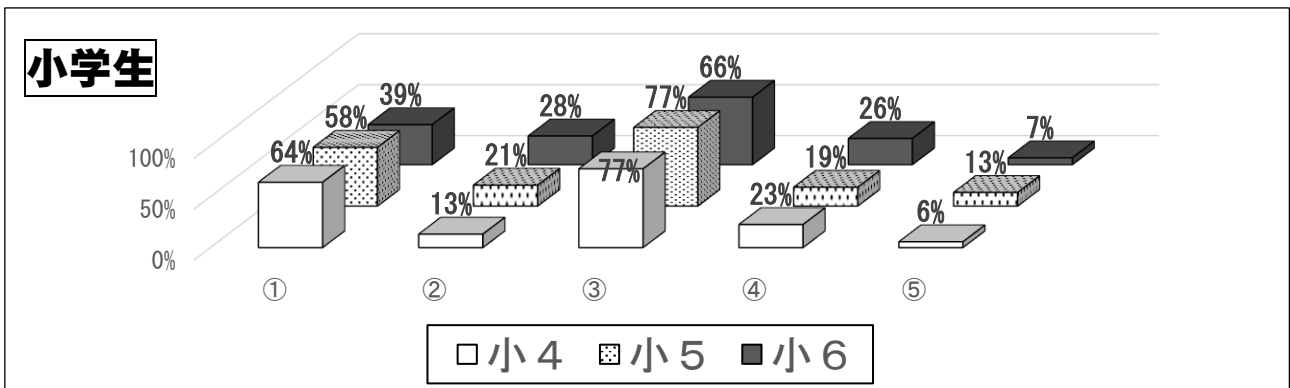
④ 学年別不読者率の全国との比較

(不読者率とは、全児童生徒に占める、1か月間に1冊も本を読まなかった児童生徒の割合)

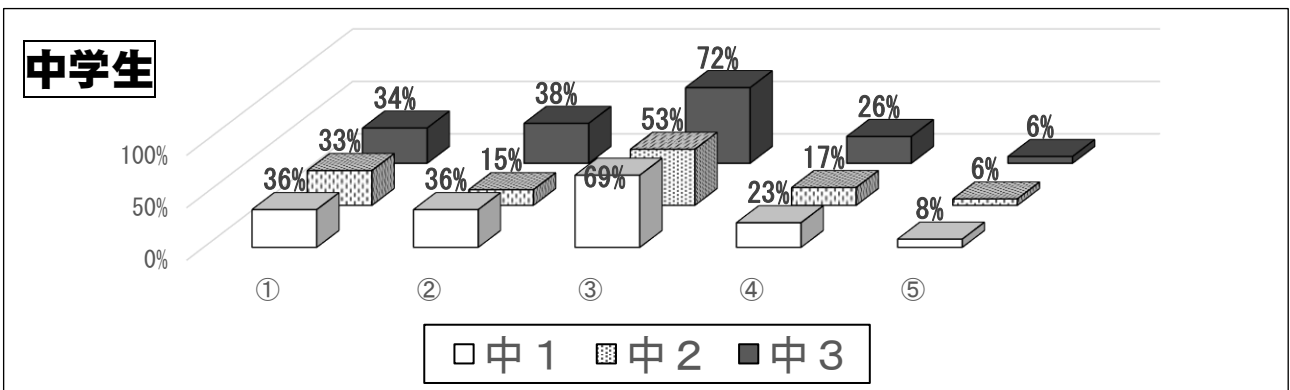


- ・ 小学生の不読者が全国よりも多い。
- ・ 中3の3人に1人以上が全く本を読んでいない。

⑤ 不読の理由 (複数回答)



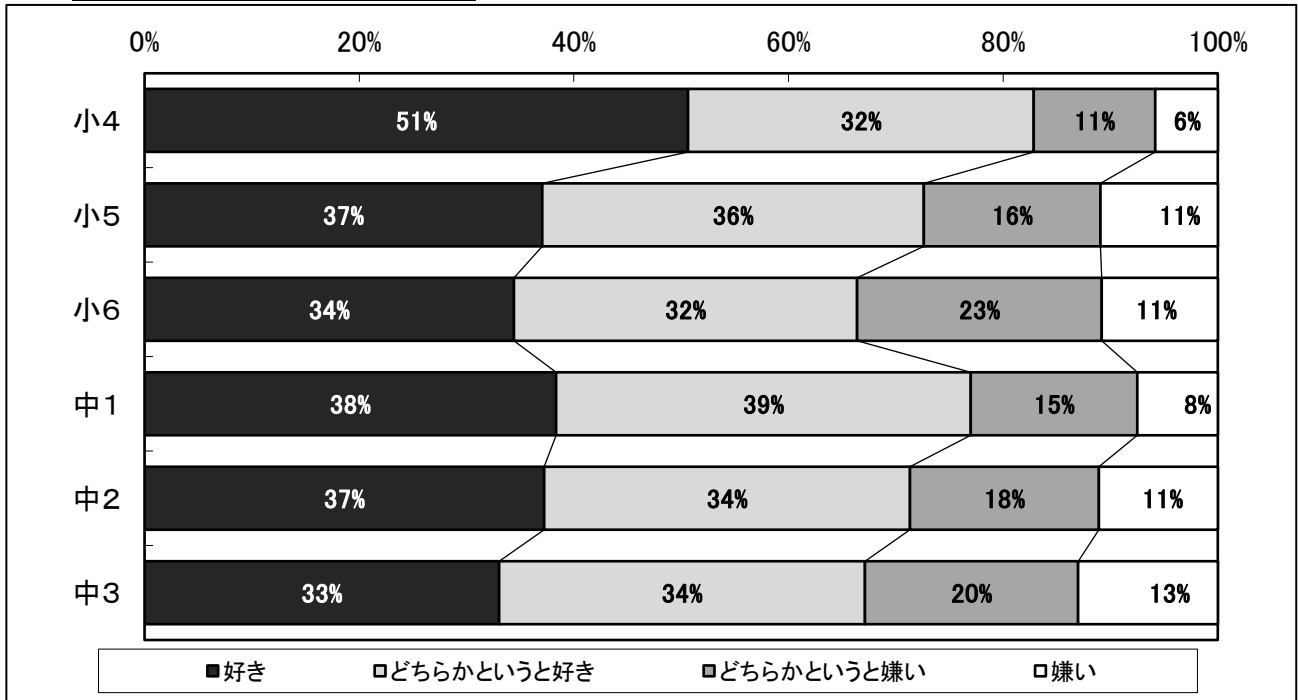
- ① 本を読むことが好きではない ② 勉強で時間がない ③ 他のことをしている方が楽しい
 ④ 身近に読みたい本がない ⑤ その他



- ・ 全体として「他のことをしている方が楽しい」という回答が多い。
- ・ 小学生の不読者は、読書に好まない傾向がある。

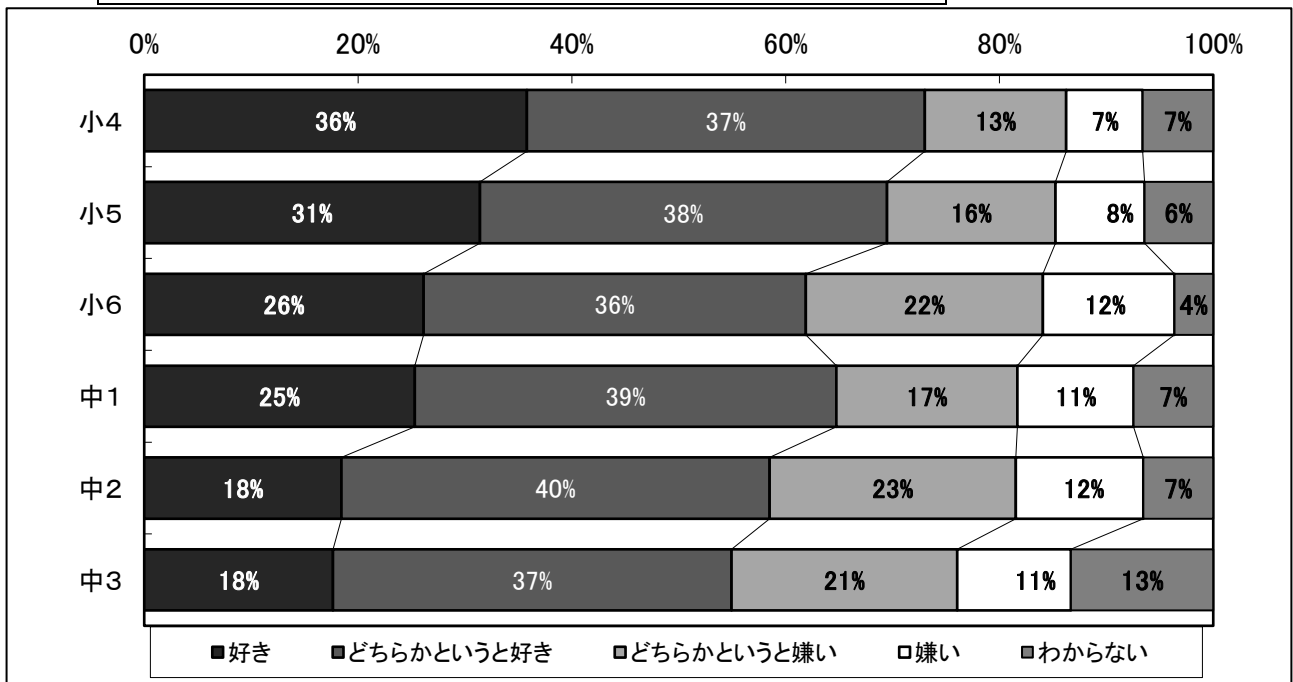
(2) 児童生徒の読書に対する意識について

① 読書の好き嫌い



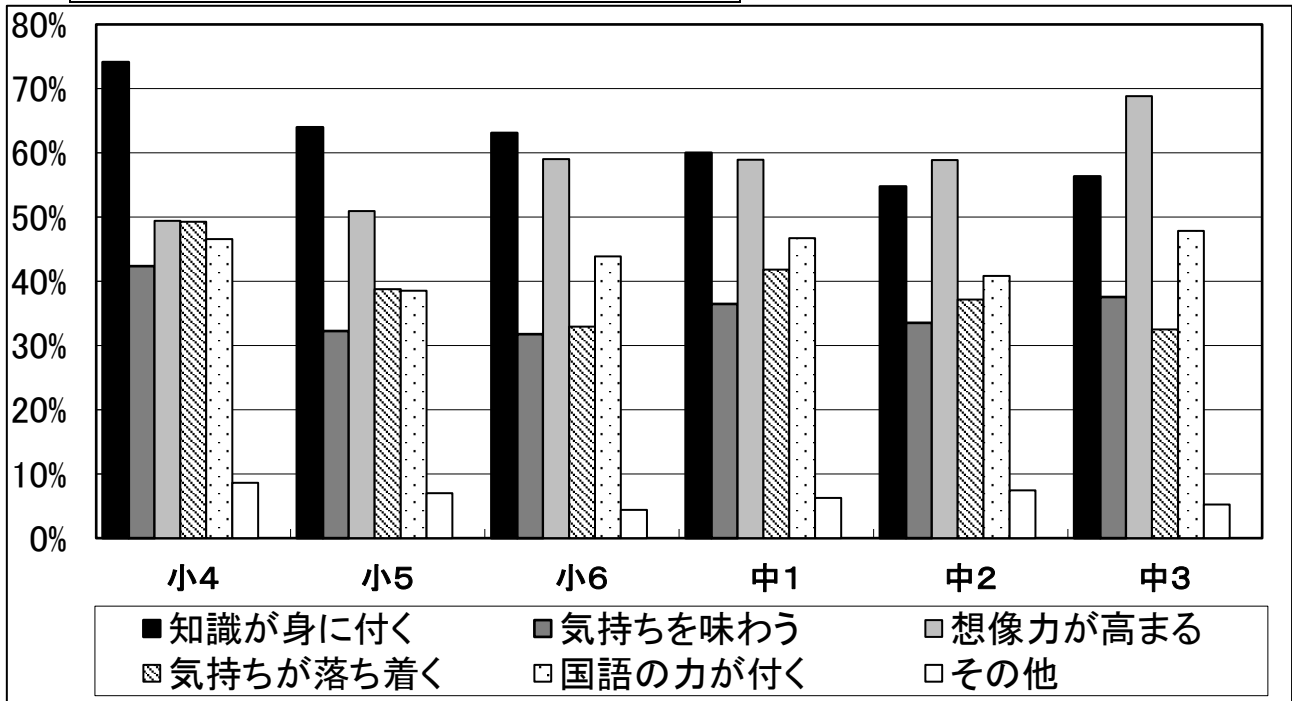
- ・ 7割程度の児童生徒は読書に対して好意的である。
- ・ 学年が上がるにつれ、「嫌い」という回答が増えている。

② 本や資料を使った調べ学習の好き嫌い



- ・ 学年が上がると好意的な回答が減っていく。

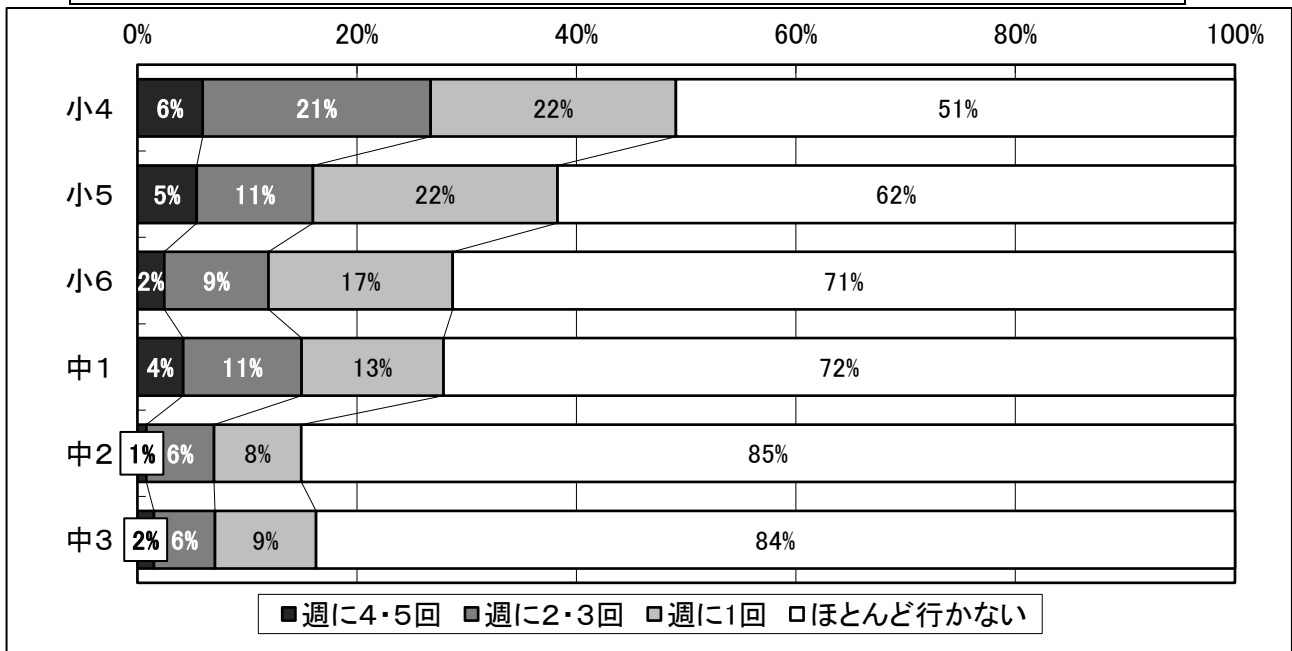
③ 読書のよさとは（複数回答）



- ・ 小学生の段階では「知識が身に付く」と捉える児童が多い。
- ・ 学年が上がると「想像力が高まる」という読書のよさに目を向けるようになる。

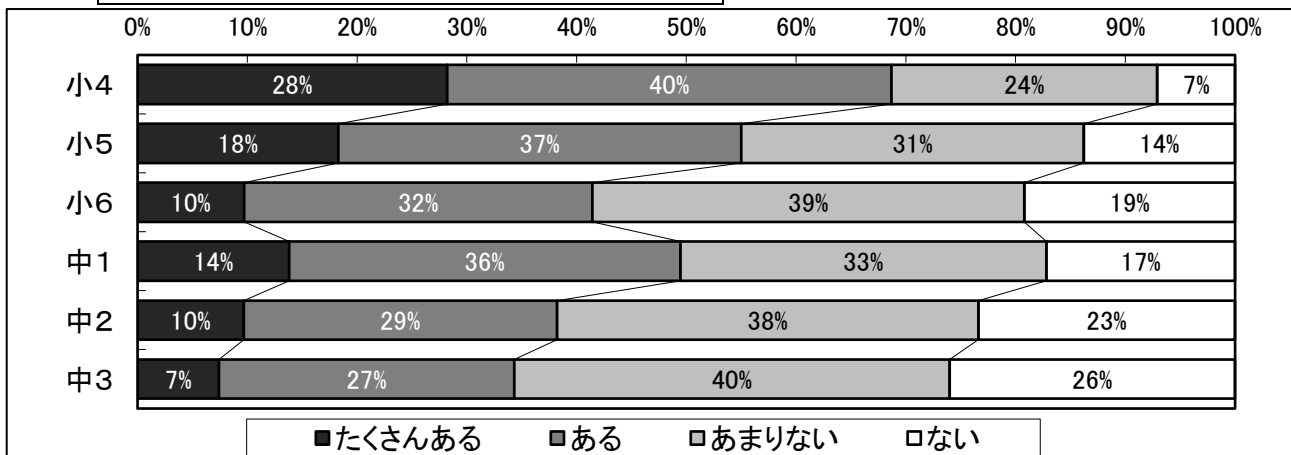
(3) 学校の読書環境の整備に向けて

① 授業以外で、1週間に学校の図書館を利用する回数



- ・ 学年が上がると、利用が減少していく。
- ・ 中学生は8割以上がほとんど利用していない。

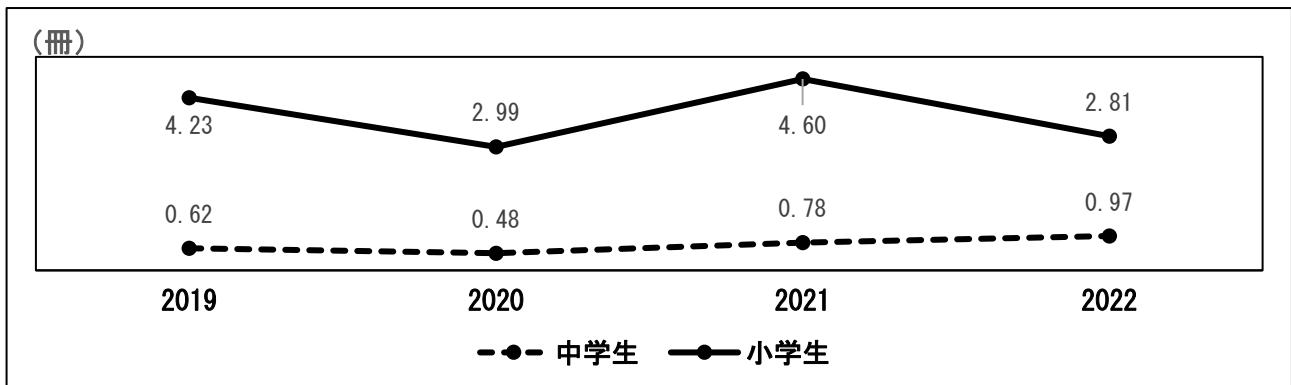
② 学校に読みたい本があるか



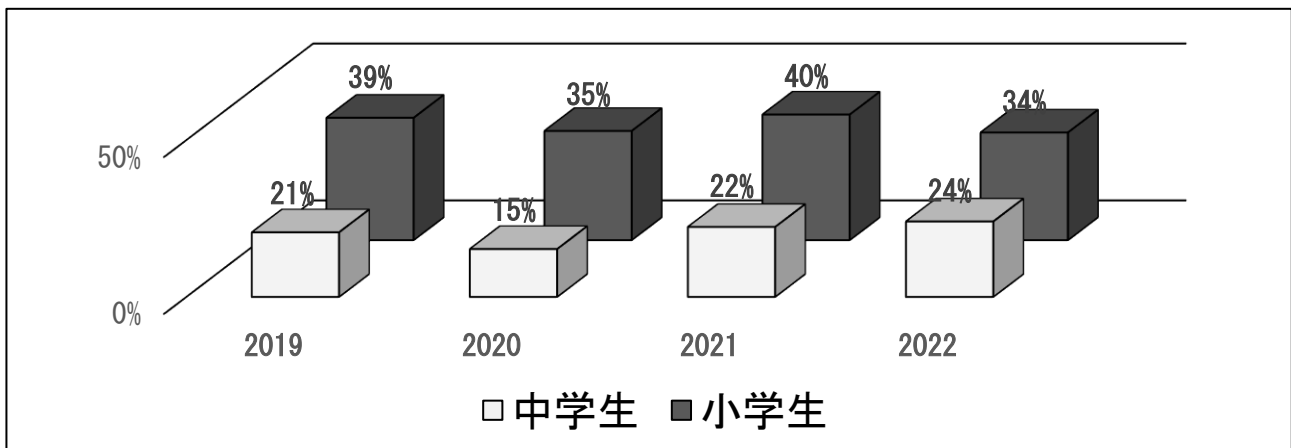
- ・ 小学生の半数は学校の蔵書に満足していると思われる。
- ・ 学年が上がるにつれて、「ない」という回答が増えていく。

③ 貸し出し状況など

(ア) 一人当たりの1か月の貸出冊数の変化

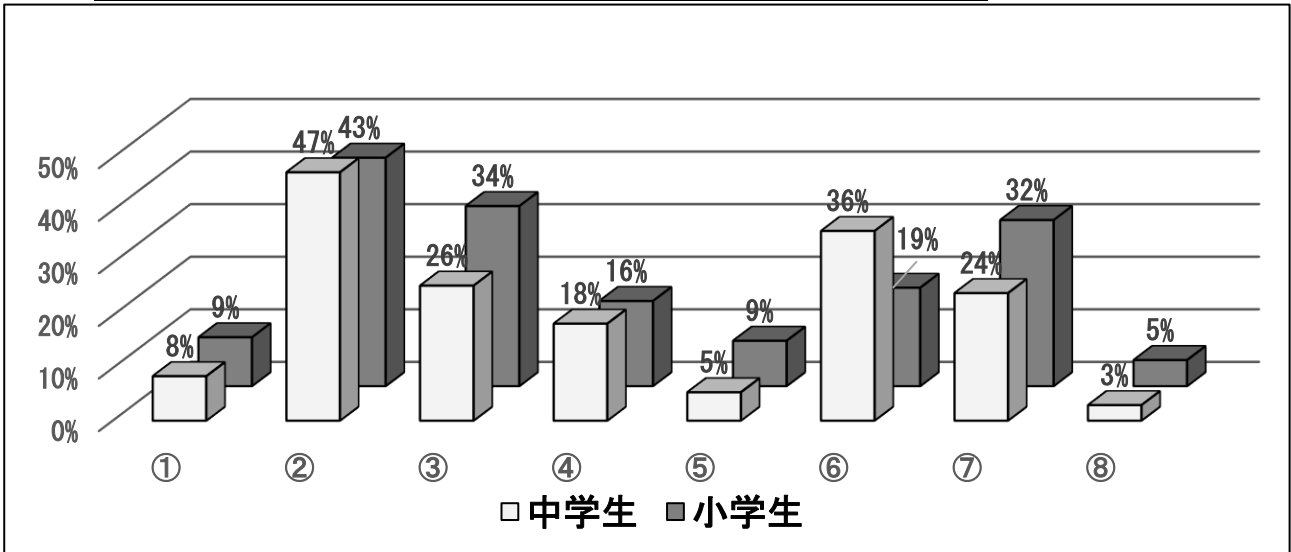


(イ) 1か月に読んだ本のうち、学校図書館の本が占める割合



- ・ 小学生の1か月あたりの貸出冊数が減少傾向である。
- ・ 中学生の利用が増加傾向である。

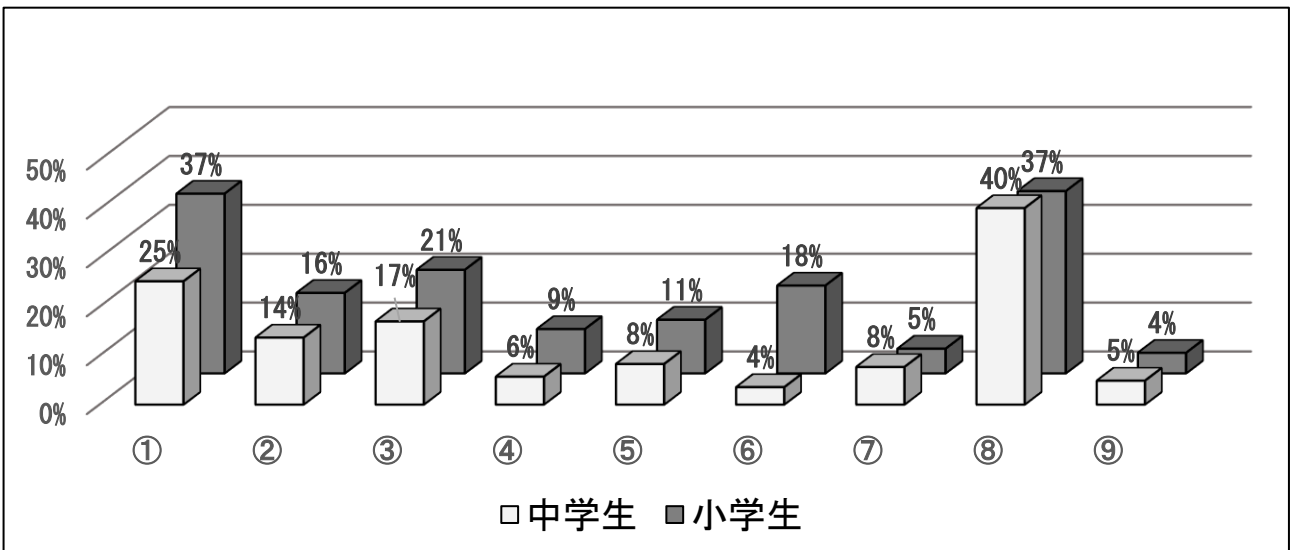
④ 読書のきっかけとなるもの（複数回答）



- ① 先生 ② 友達 ③ 家族 ④ テレビ・映画 ⑤ 新聞・雑誌
 ⑥ インターネット ⑦ いない・ない ⑧ その他

- ・ 友達や家族など、身近な人の影響が大きい。
- ・ 小学生のうち「ない」という回答が多いが、中学生になるとインターネットなどを利用して自分で情報を得るようになる。

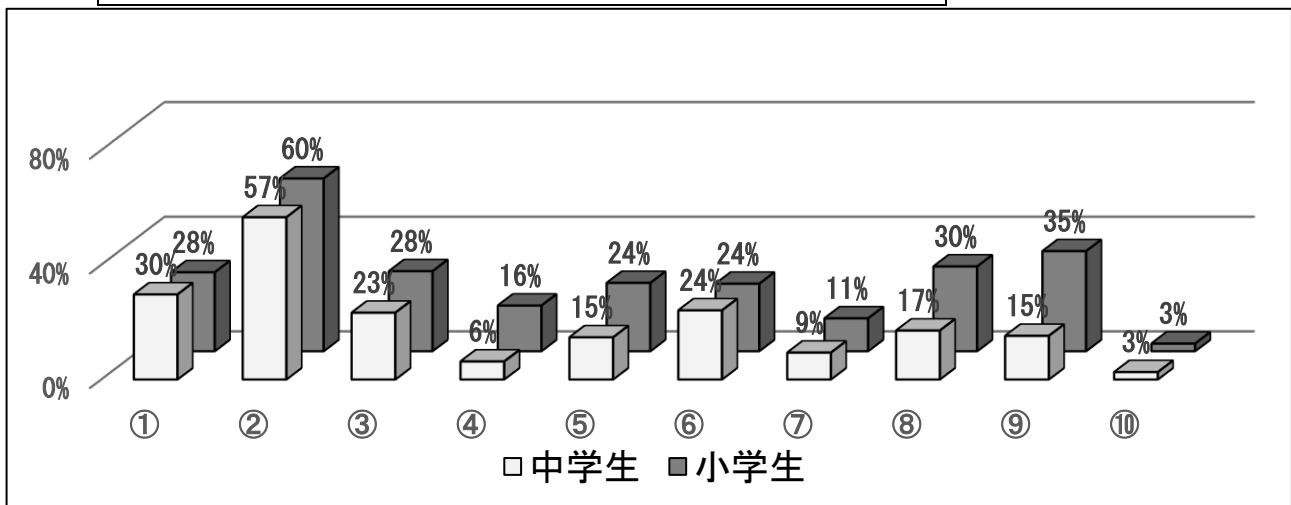
⑤ 学校図書館で困っていること（複数回答）



- ① 読みたい本がない ② 何を読むとよいか分からない ③ 本の場所が分からない
 ④ どこに返すのか分からない ⑤ 使いたいときに開いていない ⑥ 静かに本が読めない
 ⑦ いつ開いているのか分からない ⑧ 困ることはない ⑨ その他

- ・ 小学生の方が様々な手助けを必要としている。

⑥ 学校司書にもとめるもの（複数回答）



- ① 本の場所を教えてくれる ② おすすめ本の紹介 ③ 調べ学習のサポート
 ④ 読み聞かせ ⑤ 本の整頓 ⑥ いつも図書館を開けてほしい
 ⑦ 話し相手 ⑧ 図書館を飾る ⑨ 騒いでいる人に注意 ⑩ その他

- ・ 全体として「おすすめの本」の紹介を期待している児童生徒が多い。
- ・ 小学校では、「いつも図書館を開けてほしい」「騒いでいる子人に注意してほしい」など、司書の常駐を望む声大きい。

3 おわりに

本年度の調査では、中学生の読書量や学校図書館の利用状況など、一部が好転したものの、全国調査の結果と比較すると、読書量・不読者率ともに課題の残る結果となった。

個々のデータに目を向けると、1か月に何十冊も本を読んだり、毎日のように学校図書館に足を運んだりするような本が大好きな子はたくさんいる。しかし、不読者率は全学年で前年を上回るという結果であった。全国調査でも同じような傾向が見られ、小学生の平均読書冊数が増加する一方で不読者率も上昇していて、本を読む子と読まない子の二極化が進んでいるとみられる。

不読の子どもから、「他のことをしている方が楽しい」という声が聞かれるように、現代社会の子どもたちの周りには、テレビゲームやSNS、動画サイトなど、魅力的な娯楽が溢れている。実際に、全国学力・学習状況調査では、愛知県などの都市部を中心に、テレビゲームや動画視聴に多くの時間が費やされているという結果が出ている。

それでも、読書の価値というものは、いつの時代も色あせるものではない。言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである。一冊の本との出会いが子どもの人生を変えることもある。学校や学校図書館は、その出会いの場としての役割を果たすことができるよう、学校司書、公立図書館などと協力しながら、子どもたちのよりよい読書環境づくりを進めていかななくてはならないと考える。